

国際児童年に寄せて

谷村第二小学校長
笹本清繁

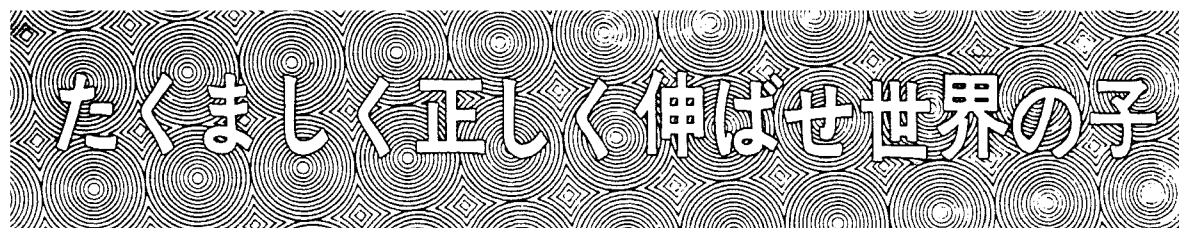
◎今年には国際児童年である

国連で「児童の権利に関する宣言」が採択されてから今年でちょうど20年になります。20年の記念の年であるため、世界各国とも子供のための様々な記念事業が計画され、実施に移されています。

これらの行事が子供たちにとって楽しく、一生の思い出ともなることを期待しています。またこの事業を通して世界の子供たちが真に理解しあい、言葉のちがいを越えて結ばれ、平和を愛し人類の幸福につながる事が出来るならば国際児童年の意義が果たされたと言えます。

◎子供には自然を与える

国際児童年の諸行事や事業が進められる中でも、日本の場合は、子供の成長にふさわしい環境づくりに大きな比重がみられるようです。子供にふさわしい環境とは何か。子供の遊び場設備や、悪書追放もよいことだと思えます。然しもっと基本的な考えなくてはならないのは、文化的な諸施設、諸行事と共に遠ざかってしまった自然をとりもどすことではないでしょうか。夏休みになって海や山へ子供たちをつれ出すこともいいことには違いありませんが、もつと身近で日常にふれられる自然を求め



(明るく…健やかに…)

たいのです。社会科でも理科でも言葉と文字と映像で教えられてはいませんか。遊びといえばテレビやインベーダーゲームというように、すべて間接経験におきかえられていくが多すぎるのではないのでしょうか。自然の中で育つ子供の姿。草笛をふき、どろんこになつて魚をつかまえ、足や手に傷を負っても平気で遊びに夢中になつている子供。それこそがたくましく、しかも豊かな人間性が育てられる基本だと言えないでしょうか。今こそ大人たちは、子供の真にあるべき姿を見直して軌道修正していかねばならないと思います。

◎子供たちの幸せのために

子供のしあわせを願わぬ親はありません。子供はかしく、そしてたくましく育つよう、望まないとはいません。然し世の多くの親は、子供のしあわせを願いながらそれは逆のことをして来たのではないのでしょうか。それは親だけではありません。政治は、子供は常に大切だと叫びながら、その実、子供たちをきびしい受験競争の中に追い込み、その改善は全くなされていらない現状ではありませんか。子供たちにとって何がしあわせなのか、それを実現するために親は社会は、そして特に行政は何をすべきか。徹底した反省と、それを踏まえて今後の在り方を検討し、実現しなければなりません。我々の未来は、すべて子供たちにかかっているのですから……。

国際児童年に思う

禾生一小教諭
佐藤唯一

「すべての子どもを自分の子どものように大事にしよう」というのがこの国際児童年の一つのスローガンです。このことは、私たちおとなが子どもたちに何をすればよいかを考えるよい機会だと思えます。

しかし、今の子どもに何をすればよいかというよりは、むしろ、子どもの「生きる力」をどう育ててやるかを考える必要があると思えます。今の子どもは、流行に敏感で、好奇心が強く、いわゆる「現代っ子」といわれていますが、小学生は自殺しないと聞かされていたのに年間十人以上もあり、その姿容よりは従来の発達理論ではとらえにくいほどです。小学校



(優勝した宝チーム)

少年野球「宝チーム」

再び県を制覇!!

第16回山日杯県少年野球大会で都留市代表の宝チームは並み居る強豪を抑えて二度目の栄光を勝ち取りました。

高学年を例にすれば、キャン・エイジはなくなり、外ではマンガに夢中になる。そして、依頼心が強く、ひ弱で、骨折しやすく、やる気が乏しい……といわれ、まさに生きる力を失いつつあります。今の子どもたちは、二十一世紀の主役になるのです。私たちは、今こそ、子どもたちがどのような環境のなかにいるのか十分認識し、子どもたちの豊かな発達にふさわしい指導のあり方を、学校はもちろん、親、地域住民が一体となって作り出す努力が求められます。